御三家の反逆

下

南原幹雄

御三家の反逆 下

南原幹雄

江苏工业学院图书馆
藏书章

〈著者略歴〉

南原幹雄（なんばら・みきお）

昭和13年3月、東京生まれ。早稲田大学政経学部卒。昭和48年、「女絵地獄」で第21回小説現代新人賞受賞。昭和56年、「闇と影の百年戦争」で第2回吉川英治文学新人賞受賞。主な著作に「鴻池一族の野望」「暗殺者の神話」「北の黙示録」「御庭番十七家」「御三家の犬たち」「神々の賭け」「寛永風雲録」「覇者の決まる日」「御三家の黄金」「幕府隠密帳」など。

御三家の反逆〈下〉

一九九一年一二月二五日　第一刷発行

一九九二年二月二五日　第二刷発行

著者　南原幹雄

発行者　菅　英志

発行所　新人物往来社

東京都千代田区丸の内三―三―一（新東京ビルヂング）〒一〇〇

電話〇三（三二一一）三九三一（代表）振替東京六―一五一六四三

印刷所　共同印刷

製本所　小高製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

©南原幹雄　Printed in Japan（定価はカバー・帯に表示してあります）

ISBN4-404-01885-1 C0093

御三家の反逆〈下〉　目次

秀忠薨去 7
金時凧 32
元賛取り 57
唐人拳 83
落葉 110
若衆歌舞伎 136

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

家光病む　159
上使　183
大上洛　208
大垣会談　231
猛きこころ　255
叛旗　277

装幀／伴　颯

御三家の反逆〈下〉

秀忠薨去

一

新春にはすこしはやい春霞が、正虎の視界をおおいだした。

霞は山々の中腹にたなびき、野面をおおって、空にまでほのじろくひろがっていった。

はるか遠くの空から春雷のひびきがきこえ、春嵐のおとずれを予感させる天候であった。正虎にとって、どこか不吉な予感のする空模様である。

息ぐるしさが正虎にしのび寄ってきた。呼吸するたびに息のつまるような圧迫感におそわれた。必死に圧迫感からのがれようとしても、息ぐるしさはあくまでも絶えることがなかった。

そのとき、霞のなかから白小袖に白羽織をまとった身分の高い武士があらわれた。

正虎がおどろきに打たれたのは、その武士の眉間に〈忌〉の文字が墨で書かれていたからである。年ごろは三十前後であるが、顔には表情がなく、ほとんど死人の相をしていた。したがって正虎にはそれが誰であるか、よくわからなかった。知っている人物のようであり、またそうでないようにも見えた。

「もし……」

声をかけてみたが、聞こえなかったとみえ、その人物は正虎をふりかえることなく、無言であるい

ていった。その背中には、葵の紋所が白羽織のうえに金文字でくっきりと入っていた。
正虎はおもわずその場に跪いた。両手をついて、
「もし……」
もう一度声をかけたが、今度もふりかえらなかった。
「南無阿弥陀仏……南無阿弥陀仏……」
ただくりかえし名号をとなえる声だけがうつろに聞こえた。
白装束の人物は霞のなかへあるいてゆき、しだいに正虎の視界から遠ざかっていった。
正虎は跪いたまま見おくったが、息ぐるしさが急速におそってきた。
(どなた様であらせらせましょうや……、何処へむかわれますや……)
正虎は胸ぐるしさを必死で堪えながら、声なき声でたずねた。
白装束の人物がなにやら口にしたが、正虎には声がとどかなかった。
(もう一度、お聞かせくださいませ)
正虎がしきりにうったえると、
「江戸城は鬼の棲家となりはてた。あな、おそろしや……」
そういった言葉がきこえ、白装束の人物は蹌踉とした足どりで霞のなかへ消えていった。
息ぐるしさについに堪えられなくなって、正虎は譫言を口にしながら、目ざめた。
(夢であったか……)
目ざめて正虎は気がついた。全身に脂汗をかいていた。やっと正虎は息ぐるしさから解放された。
(夢でよかった。だが、夢のなかの人物は……?)
不気味な〈忌〉の文字を額につけて霞のなかへ消えていった人物が何者であるか気になった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

顔貌はよくわからなかったが、徳川一門の人物であることはまちがいない。しかも三十前後の年齢ならば、おもいつくだけでも何人かいる。まず正虎の主人、尾張徳川義直が今年に入って三十三歳。紀州頼宣が三十一歳、水戸頼房が三十歳。さらに駿河大納言忠長は二十七歳である。将軍家光また二十九歳であるが、これは措く。

（正夢か、逆夢か……）

いずれにしろ、夢がなにかを暗示しているような気がしてならなかった。

時あたかも、大御所秀忠は西の丸御殿において、危篤の床についている。

（大御所さまに何事があったか……）

そうおもうと正虎は気が気ではなかった。もしや大御所さまはご他界あそばされたか、そんな愁いがおこってきた。

時刻はぼつぼつ暁にいたるころである。正虎はもはやふたたび眠りにつく気持にはならなかった。おきあがって衣服を着かえ、仏壇に灯明をあげ、神棚に御神酒をささげた。

正虎はこころあらたまった気持で、仏壇と神棚に尾張家と成瀬家の武運長久、御家繁栄、子孫隆昌をいのった。尾張家の家運がこのところ揺らぎかけている。家内には別段の問題はないが、対幕府とのあいだに気まずい隙間風が吹きこんでいる。隙間風くらいならばあわてる必要はないが、これがやがては大風が吹き、嵐を呼びそうな気配である。

大御所秀忠が生存しているならば、たとえ嵐が吹いたとしても、やがてはことがおさまるから、たいした心配をすることはない。幕府と御三家とのあいだにしても、一般の家でいう本家と分家の軋轢やいき違いはあって当然である。しかも本家の主人は若く、無鉄砲で、気位がたかい。分家の主人たちは同年輩の叔父である。三人そろって血の気のおおいやんちゃ育ちだ。一波瀾あったにしても、秀

忠がいることで、ことはおさまる。けれども秀忠がもしいなくなれば、将軍と御三家とのあいだは、突っ支い棒のないまま直接ぶつかり合うことになる。大騒動がもちあがることは目に見えている。秀忠亡きあと、将軍家と御三家とのあいだをとりもつような人物がいるわけがない。

ほおっておいても将軍と御三家はぶつかり合うだろうが、若き将軍家光は頭上におもくのしかかっていた重石がとれて、御三家に鉄槌をうちおろす機会をうかがってくることが予想されるのだ。正虎は尾張家の付家老として、なんとしても尾張家をまもっていかねばならぬ立場である。正虎の一生はそのためにあるといっていい。

「殿、おはやいお目ざめで」

成瀬屋敷の家老都築小兵衛が朝の挨拶にまかりでてきた。正虎は尾張家の付家老であると同時に犬山藩の藩主であるから、自分の屋敷では殿様と呼ばれている。

「お城へいく」

と正虎は乗物の用意を命じた。

尾張家の上屋敷は江戸城吹上げにあり、義直はここにいるのだ。

正虎の乗物は麹町通りを真っすぐすすんで半蔵門にいたり、そこから桜田門へむかい、吹上げの屋敷についた。

「正虎、朝がはやいの。年をとると早起きになるらしい」

義直はまだ起きたばかりのころだった。

「手前まだ三十代にござります」

正虎がいうと、

「三十九歳でも三十代にまちがいない。それがいえるのは今年かぎりだ」

義直は苦笑した。
「殿、昨夜はすこやかにおねむりになられましたか」
正虎がよく見ると、義直の顔はやや腫れぼったく、目があかい。
「いや、昨夜は大変だった。いやな夢を見て、だいぶうなされたようだ。寝ぐるしくなって目ざめたが、不吉な夢だった。大御所さまのお身の上が心配だ」
義直の返事は正虎が予想したとおりだった。
「手前も同様にございます。葵の白い御紋服を召されたお方が〈忌〉の文字を額におつけになられて、霞のなかへ消え去ってゆかれました」
正虎がそういうと、さすがに義直はいやな顔をした。
「それはもしや、大御所さまか？」
「いえ、年ごろ三十歳前後の徳川御一門のお方にござります」
正虎がそういったので、ますます義直はいやな顔をした。
「その年ごろに該当する一門の者は幾人かおる。なかでもおもいあたるのは、余か、それとも駿河大納言……」
義直の勘はするどい。正虎が想像したのも、義直か忠長である。いずれも家光ときわめてソリが合わぬ立場の者だ。
忠長は、すでに前年、駿府から甲府に蟄居を命じられていた。かつての越前宰相忠直と同様、日ごろ我儘な振舞いがおおく、暴慢な行状を咎められての処置であるが、それにはきわめて政治的なにおいが色濃くあらわれていた。忠長の我儘とか暴慢とかは、以前忠長が秀忠に百万石かあるいは大坂城を無心したことを指しているようだ。忠長がかつて家光以上に父母の寵愛をあつめ、一時は秀忠の後

継ぎに擬せられたためしのあったことが、三代将軍家光の時代における不遇を約束したといっていい。

「どなた様かはわかりませんでした。されども大御所さまの薨去はいずれ避けられぬことでございましょう。それに際して、大御所さまがお亡くなりになられれば、それにともない御不幸を背負いこむ一門のお方がいらっしゃるということではございませんでしょうか。そんな気がいたしました。そうでなければ大変幸せなことでございます」

正虎がそういうと、義直は返事をしなかった。不機嫌にだまりこくって、正虎から視線をはなしたのだった。

二

寛永九年正月二十四日、亥の刻（夜十時）をすこしすぎたころ、大御所秀忠は息をひきとった。正虎が夢を見た夜からかぞえて七日めのことである。

御三家の義直、頼宣、頼房とそれぞれの家老たちは召されて、西の丸御殿の秀忠の病間におもむいた。

病間には将軍家光をはじめ、天樹院（千姫）、勝姫、お静の方、保科正之など秀忠の肉親家族が呼び寄せられており、典薬頭半井驢庵、今大路道三、さらに奥医師らが見まもるなかで、秀忠は永遠の眠りについたところであった。

義直、頼宣、頼房は枕辺まで近寄り、秀忠と永のわかれをつげた。御三家にとっては年のはなれた兄であり、家康歿後は父がわりもつとめた秀忠であった。家康のような英雄的な人物ではなく、どちらかといえば愚鈍なほど実直であり、謹厳であったが、それだけに弟たちへかわらぬ愛情をそそいでくれた兄であった。特筆するほどの武功もなく、天下分け目の関ヶ原の合戦には道中に手間どり、遅

参して家康から大目玉をくったくらい、かがやかしい武功とは縁がなかった。けれども二代目として家康のいいつけをよくまもり、徳川幕府の基礎づくりに精をだし、諸制度、法律などをととのえていったばかりでなく、戦国時代の後始末も実直に手まめにおこなってきた業績はおおきい。しかもそういう功績をけっして自分のものにせず、父の遺命としたり、閣老たちのはたらきに帰してきた。かえってひかえめな性格が、柩をおおった今となっては底びかりしてくることを病間にあつまった者たちは感じているのだった。

秀忠のひかえめな生き方というのは、三男でありながら秀康をこえて、家康の後をついだ後ろめたさからもきているのではないかと正虎はおもった。秀忠が秀康をこえたがために、後年になって子の忠直を豊後に配流しなければならない副産物もおこった。秀忠の地位を権威づけるために弟忠輝を配流させることにもなった。将軍位は秀忠にとって、あるいは重すぎるものであったかもしれなかった。重すぎた将軍位から解きはなたれて、秀忠は今やせいせいと身軽になって黄泉路を旅しているのではないかと正虎はおもった。

秀忠が自分の愛した忠長を最後にはしりぞけて、家光を将軍位につけたのも、自分の過去の経験から、血筋によって長男を選択したということだろうと正虎は感じた。秀忠は死に際しても生真面目な顔をしていた。誠実に自分の一生を生き、懸命に自分の役目をはたしたのだという実感をうけた。

秀忠の死後、家光と御三家の対立という骨組が生まれたとしても、それは秀忠の責任とはいいがたい。幕府内、徳川家内でかならず生じてくる問題であった。将軍がいて、御三家がある以上、軋轢、弊害がおこるのは仕方がなかった。外様大名らにたいしては、御三家はおおいに力づよい味方となっても、内部においては将軍の地位をおびやかす敵になる可能性があるのだ。おもえば……、

（御三家はなくてはならず、あると将軍と揉めごとをおこすなんとも厄介な代物だ）

というふうに正虎は位置づけた。

家光はあくまでも神妙に秀忠とわかれを告げた。今後は一人で幕府の屋台骨を背負っていくという意気ごみがうかがわれた。

正虎は秀忠の死に顔を一瞥して、顔が妙にどすぐろいのを感じた。目のまわりに蒼ぐろい隈ができているのも気になった。不健全ともいえる印象がのこった。生前の秀忠はもちろんこんなことはなかったので、病んでこのようになったのかとおもった。

義直も頼宣も頼房も、ほんとうの父をうしなったような哀しみと衝撃にうたれ、三人とも涙をながしていた。

正虎はこの三人を見るにつけても、今後の御三家が生きていくうえでのきびしさを感ぜずにはいられなかった。義直も頼宣も頼房も東照権現家康の子であるが、時代はすでに家康の孫の時代にうつっていたのだ。

(御三家は無用の長物という存在になっているのではないか……)

正虎はまだ秀忠の遺体が横たわっている病間のなかでそうかんがえた。将軍の輔佐と血筋をまもるという目的は今後も生きているにもかかわらず、内部では将軍と御三家の葛藤が予測された。今日にもそれが熾烈におこなわれそうな気がした。

老中らは別室にひかえ、秀忠との永のわかれを待っている。秀忠葬儀の準備がすでに土井利勝を中心にはじまっていた。

(今日を期して、明日から奔流のごとく時代がかわっていく……)

秀忠が大御所に隠退してから今年ですでに九年がたち、表むきは三代将軍家光の治世になっていたが、内実にはまだ秀忠の意志が生きていた。政治にもおおいにそれが反映していた。秀忠の意志を無

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com